

大 県 南 遺 跡

——市道大県6号線建設に伴う——

1986年3月

柏原市教育委員会

は　し　が　き

柏原市は、毎年大小各種の規模の公共事業を実施しています。市域の大部分が文化財の包蔵地である事から、公共事業に際して発掘調査を実施する事例も多くあります。

これらの公共事業は、田畠や山林等を新規に工事するだけではなく、既設の施設改修や改装、拡張等の調査面積が狭小な場合も多々有ります。柏原市教育委員会では、これらの工事に際してもおごそかにする事なく出来る限り発掘調査を実施し、鋭意各遺跡の実態把握に取り組んでいます。これらの発掘調査による成果は、大規模な発掘調査によるものとは程遠いものがあります。しかし、少量ながら検出した遺構や遺物から遺跡の種類や性格、規模等の一端を知る事が出来、古環境復元に際して重要な資料となる事があります。

今回の調査も狭小な調査面積しかない事例でしたが、種々の遺構や遺物が検出できました。昨年度の調査によって検出した道路敷遺構や斜面地に構築した家屋等がさらに続く事が確認され、山下寺との関わりが重要なものとなりました。また、山下寺の寺域と考えられる場所から多量の瓦も出土しました。

今回の調査にあたっては、地元の方々を始め、柏原市建設部土木課ならびに調査関係者各位に種々な御協力をいただき深く感謝の意を表します。

昭和61年3月

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が柏原市公共事業（建設部土木課担当、市道大県 6 号線）に伴なって実施した大県南遺跡の事前緊急発掘調査概要である。
2. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課 北野 重を担当者として、昭和59年11月12日から同年12月 8 日まで実施した。
3. 調査の実施及び本書の作製にあたっては、多くの方々に参加及び協力を頂いた。ここに記して感謝の意を表します。

石田 博	竹下 賢	安村俊史	桑野一幸	田中久雄
石田成年	仲井光代	谷口京子	秋田大介	伊藤泰臣
森田好則	松村富子	藤本直美	中田ゆかり	江波佐知子
坂本道子	乃一敏恵	松成早苗	横関勢津子	吉居豊子
村口ゆき子	飯村邦子	竹下真紀	(順不同・敬称略)	

4. 実測中に表示した方位は磁北、標高はT. P.である。
5. 本書の編集・執筆は北野が行なった。
6. 本調査にあたっては写真、実測図などの記録を作製するとともに、カラースライドを作製した。また、出土した遺物は柏原市教育委員会で保管するとともに、柏原市歴史資料館で展示している。

目　　次

第1章 大県南遺跡.....	1
第1節 調査概要.....	1
第2節 調査.....	3
第3節 出土遺物.....	7
第4節 まとめ.....	12

第1章 大県南遺跡

第1節 調査概要

大県南遺跡は、縄文時代から中世に至る複合遺跡である。生駒山地西麓に位置し、多くの集落遺跡が密集している地域の中心部分を占めている。北側から、山ノ井遺跡、平野遺跡、大県遺跡、大県南遺跡、大平寺遺跡、安堂遺跡がある。近年、市文化財担当の発掘調査が多数行なわれた結果として、遺跡の時期や性格、規模等の実態が徐々にではあるが明らかになってきており、大県南遺跡も数次の発掘調査によって次第に古環境が復元されるようになった。

今回の調査は、柏原市教育委員会が昭和59年度に実施した市道大県6号線建設に伴なう緊急発掘調査である。市道大県6号線は、柏原市建設部土木課によって計画され、鐸比古神社参道の石段下から等高線にほぼ平行して南下し、皿池農道に接続する幅員4m、延長300mの道路である。昭和55年度を初年度とする6ヶ年にわたる継続事業であり、各年度の一定区画の範囲を計画に基づき発掘調査を先行させて実施している。

この道路建設に関わるこれまでの調査成果を概略しておきたい。

昭和55年度は、鐸比古神社参道階段掘から南へ約40~50mの区間（毎年同程度の距離）において、大部分が急斜面の崖となっており、ほとんど遺物が出土しなかった。この時には、工事に際して立会調査であったが、南端の小さな開折谷からその下層部分に遺物包含層が発見された。この結果により次年度から事前の発掘調査を実施するようになった。昭和56年度は、開折谷を2ヶ所発見し、古墳時代後期から奈良時代までの遺物を検出した。昭和57年度は、調査地の両脇に民家が隣接し、割合急峻な斜面地である事や谷筋で湧水が多い事から調査は限定的なものにとどめた。狭小なトレッチではあったが、多量の遺物が出土し、開折谷に遺物包含層が厚く堆積している事が確認された。時期は、5~7世紀代のものが多く認められ、古墳の存在や飛鳥時代（7世紀）の小型高杯や軒瓦等が出土している事から集落に伴なう墓址群の存在が予想された。この他に中世の遺物も多数出土した。

昭和58年度は、同様の急斜面地であるが、尾根筋に近く古墳の存在も予想された為、ほぼ全面的に調査を実施した。造構は、瓦積みの基壇とその上面にピット列及び西側斜面下に道状遺構が発見された。これらの遺構は、6世紀末から奈良時代の時期までが想定され、急斜面にかかわらず土地の有効利用が計られていた事がわかる。

各年度ごとに発掘調査がスムーズに実施されるようになった。この事は、柏原市の実施する工事であり、担当課の土木課と教育委員会が幾度かの協議により生み出した所産である。単なる法定手続としてではなく、遺跡の保存に対して熱意を持って対処して頂いた土木課の方々と多くの協力を頂いた土地所有者達の賜ものと感謝している。



図-1 調査区位置図

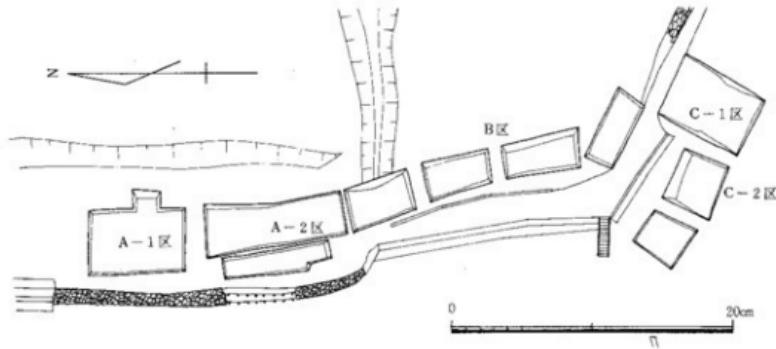


図-2 調査区平板図

第2節 調査

調査は、道路予定地内の掘削可能な場所を3区分し、北側からA、B、C区とした。実効幅員4mの道路で現状の地形から考慮し、掘削土の仮置の問題等からさらに小区画のトレンチを設定した。

A区

A-1、2区に分けた。A-1区は、南北7m、東西4.5mのトレンチである。基本土層はトレンチの方向と等高線が同じである事から南北には水平方向を成し、東西方向には、上層から下層に随時転落したように現況と同様に傾斜を示す。1層は、腐食土を含むぶどう畑の耕作土である。約25cmの厚さを測る。2層は、明黄黒色土で近世の遺物を含んでいる。これもぶどう畑の耕作土である。約35cmの厚さを測る。3層は、黄灰色粘質土で2層の床土と考えられる。ぶどう畑の開墾には多量の土砂をふりわけ移動して、何段かの石垣も構築している。4層は、黒灰色砂質土で畑として利用される以前の旧表土であろう。厚さ20~30cmを測る。この土層からも近世の遺物が出土している。5層は、茶灰色粘質土である。古墳時代から中世の時期までの遺物を含んでいる。6層は、薄茶灰色粘質土で花崗岩の風化土である。15~30cmの厚さである。遺物は、古墳時代後期から奈良時代までのものが出土した。これらの土層は、全部が花崗岩質の土層であるため、ほとんど同成分である。各土層間の相違は、それぞれの土層の中にわずかな異なった不純物を含んでいるという感じである。

5層除去後にピット3ヶと礎石を検出した。昨年度の調査でも同一方向に2ヶのピット列があり、今回のピットに続くと考えられる。ピットは、35×50cm、30×27cmを測る小さなもので方径を呈し、底部は、地山まで掘込まれている。建物は、1×4間以上と考えられる。

6層除去後の地山直上で、溝一1に囲まれたピット群を検出した。溝一1は、東西方向から南へ約90°屈折している。溝幅50~70cmを測り、断面は逆台形を呈する。溝の北側部は、ピット

のある平坦面より20~30cm程高い。ピットは、方径のものと円形のものがあり、方径のものが規模が大きい。溝とピット埋土中より土器類と鉄滓、焼壁、炭、鉄製品等が出土した。

西側端で昨年検出した瓦積基壇と道状遺構の続きの遺構を確認した。基壇は、瓦ではなく、20~30cm大の礫を使用している。道状遺構は、石垣の裏込めによって取り去られている可能性が強く消滅している。道状遺構は山下寺の方へ延びるとすれば、このあたりから徐々に下ざり坂になると思われ、わずかながらその痕跡が看取される。

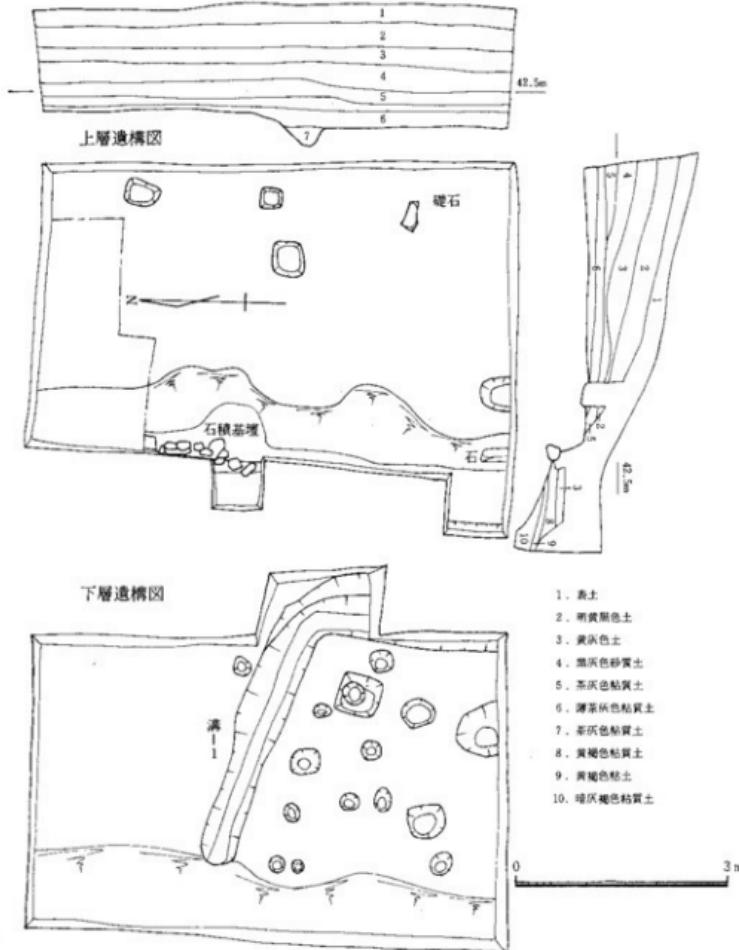


図-3 A-1 調査区

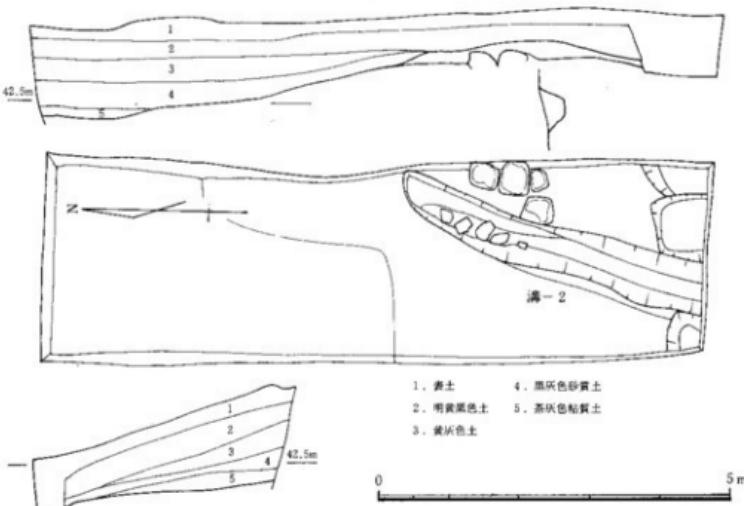


図-4 A-2 調査区

A-2区は、A-1区の南側にあたり、 $3.5 \times 10m$ のトレンチである。北側は低く南東に向かって上りになっている。土層断面は、A-1区と基本的には同一である。3層除去後に集石遺構を検出した。集石遺構は、主軸を N 20° E傾け、南北 $1.5m$ 、東西 $0.3m$ の長細い石敷である。礫は、 $5\sim15cm$ 大の自然石で同一平面上に重ならず敷いてある。掘方や下層遺構がなく礫中に若干炭が含まれている位でその性格について明らかに出来ない。集石遺構下層は、A-1区の平坦面の続きと思われる同様の平坦地を検出した。ピットは検出されなかったが、傾斜変換点付近にA-1区の溝程深くはないが、わずかに遺存している溝-2を検出した。北から徐々に南へ下る溝である。溝-1、2によって囲まれた平坦地は、南北約 $20m$ 、東西約 $9m$ の広さがある。この平坦地の東側斜面地の排水を目的とすると思われる溝が南東部分に検出された。溝-3である幅 $50\sim80cm$ 、深さ $50cm$ を測る。断面逆台形を呈し、埋土は、灰茶褐色砂質土である。埋土中土師器と鉄津が出土した。7~8世紀代の遺物がある。

B区

B区は、尾根の突端部西側斜面地にある。4ヶ所のトレンチを設定したが遺構は検出されなかった。それぞれぶどう畑の耕作土があり直ぐ地山となっている。B-1区は小さな谷筋となっており、A-2区で検出した排水溝が伸びて接合しそうであるが、この谷筋が人工的なものか開折谷（自然）の根幹になるのか明瞭でない。B-4区で排水溝を検出したが、ぶどう畑の排水暗渠と思われる新しいものである。

C区

生駒山地の南西に延びた一尾根の南側に山下寺推定地がある。C区は、この推定地の北端にあたる。A、B区より一段下の斜面地と平坦地である。

東西方向に3ヶ所のトレンチを設定し、北側からC-1、2、3とした。C-1区では、約40°の急斜面下に狭いテラスと溝-4を検出した。基本土層は、主に耕作土である表土と最下層の遺物包含層に分れる。上層は何層かに分れるがほとんど近世以降の耕作土と考えられる。厚さは約50~70cmを測る。崖壊れや畠の整地に土砂を入れている状態が断面によってよく観察される。新らしくなるに従い溝は外側へ拡大されている。下層は、土師器と瓦を含む遺物包含層である。約20cmである。テラスは、40~50cm幅で東西に伸び、C-2、3区でも伸びている事が確認された。溝-4はテラスと同様に東西方向で、C-2区から2つに分岐している。

溝の南側の平坦地下層から瓦が出土した。瓦は細片であるが、狭い範囲に密集しており、山下寺に關わる何らかの遺構が南接すると考えられる。

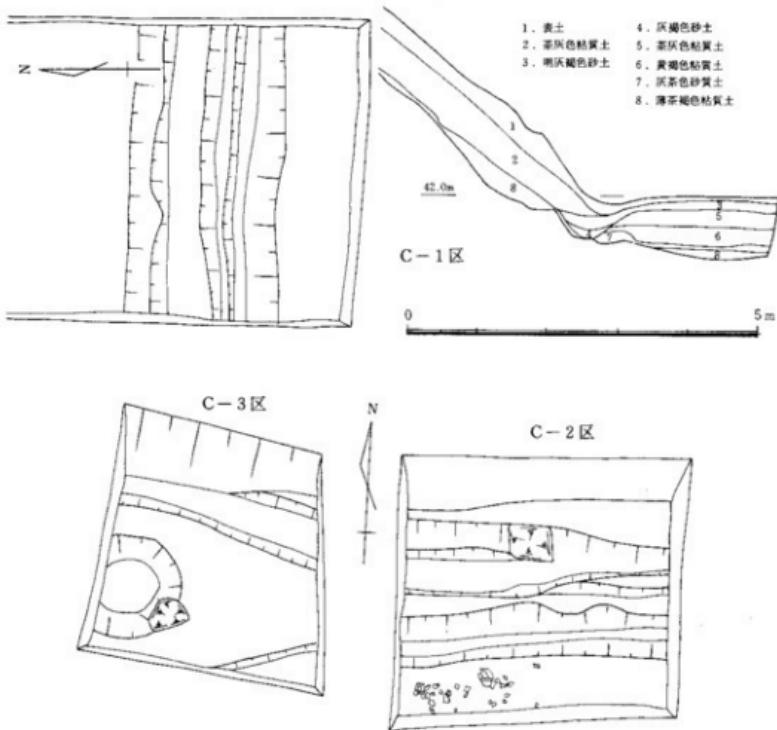


図-5 C-1区調査区

第3節 出土遺物

各調査区の各層から遺物が出土しているが、いずれも小破片で復元あるいは同化しうるものは少數である。出土遺物の種類は、土師器、須恵器、陶磁器などの土器と、軒瓦や平瓦などの瓦類と、その他に、鉄釘、鉄滓、獸骨、サスカイト等がある。順次説明を加えていきたい。

土師器

1は、土師器小皿である。A-1区の5層から出土した。口径8.7cm、器高1.4cmを測る。口縁は、底部から斜上方に真直ぐ伸び端部は尖がり気味である。底部は、平坦でなく凹こんでいる。底部の器壁は厚く約6mmを測る。口縁部付近はその半分位である。調整は、内外面ナデ調整である。色調は乳褐色を呈し、胎土は金雲母を多量に含むが精良な粘土を使用している。焼成は、良好。当地域産のものである。

2は、土師器小皿である。同じくA-1区の5層から出土した。口径9.3cm、器高1.9cm。口縁は、底部から2段に屈曲する形態で斜上方に伸びる。底部はほとんど欠損している。恐らく平底ではなく中央部が凹む形態のものであろう。器壁は薄く1~2mmである。調整は、内外面ヨコナデ調整である。色調は乳褐色を呈し、胎土は精良で金雲母とくさり礫等を含んでいる。

3は、土師器の杯である。A-2区の溝-3の埋土中から出土した。体部は内寄しながら外上方に伸び、口縁端部付近でわずかに外反する。端部はやや丸く終る。調整は、内外面密なヘラミガキを施している。内面は斜方向、外面は横方向のヘラミガキである。色調は赤褐色を呈し、胎土は精良で金雲母を多く含んでいる。焼成は良好で仕上は丁寧である。

4は、土師器高杯の杯部と脚部の接合部分である。B-1区の下層土層から出土した。接合方法は、脚部を杯にはめ込む形式のものである。脚部は、面どりをしたあとの稜と内面のしづり目がのこる。脚部は、外面に段がのこる形態のものと思われる。色調は灰褐色を呈する。

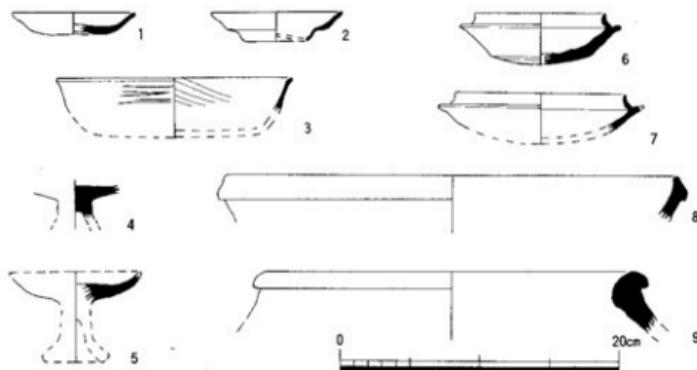


図-6 出土遺物

5は、土師器の小型高杯である。杯部のみで脚部は欠損している。A-1区の溝-1から出土した。口径9.3cmで杯部は浅い。調整は全面を平滑にナデ調整している。色調は、赤茶褐色で、胎土は精良な粘土を使用する。当地域産のものである。

須恵器

6は、杯身である。A-1区溝-1から出土した。口径9.2cm、器高3.7cmを測る。口径は著しく小さく最も小さくなつた段階のものであろう。受部は水平方向に伸び、たちあがりは受部よりやや高く内傾した後に上方に折れ曲がる。口縁端部は、尖がり気味である。底部はやや丁寧な回転ヘラケズリを3~4回行う。色調は青灰色を呈し、胎土は細砂粒をわずかに含む。焼成は良好である。ロクロ回転は左回りである。

7は、杯身である。A-1区溝-1から出土した。口径12.0cm、器高は推定3.5cmである。受部は欠損しているが、水平方向に伸びているようである。たちあがりは、受部からおり込み手法で内傾した後上方へ折れ曲げる。口縁端部はやや丸い。色調は、淡灰青色、胎土はあまり砂粒を含まず精良である。焼成は良好堅緻。

8は、須恵質のすり鉢。C-2区の包含層から出土した。口径約32cm、恐らく片口となるだろう。口縁端部は内湾気味に丸く終り、三角形状の断面を成す。色調は、濃灰青色を呈し、胎土はやや粗く砂質土系統の粘土を使用している。焼成は良好である。

9は、須恵質の甕である。C-3区の溝-4上層から出土した。口縁部は、直立気味に短くたちあがり端部を外下方へ折れ曲げる。器壁は体部に比して口縁部で肥厚する。体部外面は横方向の平行叩き、内面は横方向のハケ目である。色調は灰白色。胎土は細砂粒を多く含む。

鉄釘

A-1区上層包含層から6本出土した。断面四角形を呈し、完形品は1点もない。頭部の遺存するのは3本で、肥厚するものと直角に曲がるものがある。木目が遺存するものもある。現長は、2.9~5.0cmを測る。断面は4×5mm位で先端になるにしたがい細くなる。どのような用途に使用されたものか分からぬが、周辺に存在した古墳や火葬墓

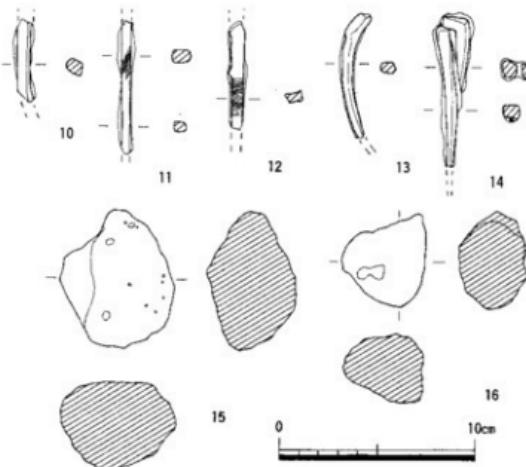


図-7 鉄滓と鉄釘

に使用された鉄釘が破壊され遺棄されたものか、今回検出した遺構に関係した家屋のものかだろう。

鉄滓

鉄滓は、A-1区溝-1とA-2区溝-3から出土した。総重量305g。15は、もっとも大きく、長径7.0cm、短径5.8cm、重量は170gである。16は、長径3.1cm、短径2.9cmの変球形に近い。重量73gである。A-1区では、鉄滓と同一土層から多くの焼土塊が出土している。恐らく小鍛冶によって生じたものと考えられるが、破壊された古墳の供獻遺物かもしれない。

獸骨

A-1区溝-1の埋土から出土した。若干焼成を受けているように思われる。遺存長3.1cmを測る。どのような獸骨か今後の観識の結果を待ちたい。

瓦

瓦類は、軒丸瓦3点と平瓦がコンテナ6箱分出土した。

18は、複弁蓮花文軒丸瓦である。中房は大きく低い凸部を呈し、その周囲に突帯状の太い圈線があぐる。蓮子は、1+6+12を配する。蓮弁は肉薄で弁央の稜線はなく、まわりに細い輪郭をつけ子葉は狭長である。蓮弁の間には蓮弁のまわりに付いた突線と同様の突線が区画する。周縁は、中高の三角縁で荒い面違い鋸歯文をつける。全体に凹凸が少ないので模様は鮮明な感じがする。瓦当と丸瓦の接合方法は、瓦当裏面に溝をほりそこへ丸瓦をさしこみ、その上下に粘土を覆う。胎土は、金雲母を少量含み、石英、長石、くさり礫等を含む。色調は、灰褐色を呈し、焼成は良好である。また、瓦当の左半分は2次焼成を受け赤変している。山下寺が焼失したかどうかの貴重な資料となるだろう。大県墓地の農道から出土した瓦と船橋廃寺の瓦に同范がある。今回出土した瓦は、船橋廃寺の瓦よりも瓦当の厚さがやや大きい。

19は、單弁7葉蓮花文軒丸瓦である。中房は凸形で小さく、わずかに滑円形である。蓮子は1+4を配置。蓮弁は弁央に細い凸線の稜線を有し、弁端は返りを付け蓮弁のまわりも凸線があぐる。子葉は細く長い。蓮弁の間には逆三角形の間弁がある。周縁が高く3重闇文を飾る。中央の圈線が太高い。瓦当と丸瓦の接合方法は、瓦当裏面に溝を掘りその部分に丸瓦をあて、その上下に粘土を覆っている。外区外縁で丸瓦との接合部分で離脱している。丸瓦の凹面の布目や瓦当と接合しやすいようにかきべらによって刻んだX印の陽起的痕跡もみられる。色調は青灰色。胎土は石英・長石や花崗岩のばいらん土の小礫を含んでいる。焼成は須恵質で良好堅緻。布目は、6本/cmと割合荒い。

この他に瓦当部分が欠損しているが、丸瓦の先端とその上下に粘土をつぎ足した破片がある。丸瓦の凹面先端をヘラによって削り落している。また、接合しやすいようにかきべらでX印の刻みが施されている。胎土は良好で、2mm程度の石英・長石を少量含む。色調は、淡灰色。

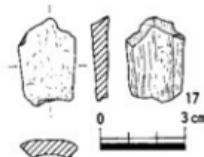


図-8 獣骨

焼成は良好である。布目の大きさは、7本/cmである。この瓦に付く瓦当は、丸瓦の弯曲からみれば、直徑の小さい型式のものと考えられる。19の型式のものか圓形の忍冬6弁蓮花文のどちらかであろう。

平瓦は、ほとんど細片で法量のわかるものはない。平瓦の凸部に施こす叩き目によって大別すると、次の4種類に分類できる。

A類は、斜格子目叩きである。2種類ある。1つ目は、格子の大きさが 0.8×1.2 cm前後で凹面の布目痕は、 10×13 本/cmとやや細かい。胎土は、良好でわずかに石英や長石を含む。色調は灰青色。焼成は須恵質のもので良好である。2つ目は、格子の大きさが 0.7×1.2 cmで格子の縦軸が太く横軸がその半分である。凹面の布目痕は、 9×10 本/cm。胎土は、金雲母・石英・長石・くさり礫を少量含む。色調は茶灰色、焼成は良好である。凹面の模骨痕や側面調整から桶巻作りと考えられる。

B類は、凸面に布軸の綾杉叩き目が施こされる。原体の幅は、小破片の為明確なものがないが、幅は約10cmのものが多い。凹面は、 7×8 本/cm、 7×9 本/cm、 10×12 本/cmの布目痕がある。模骨痕は2~3cm位を測る。この瓦もA類と同様の理由から桶巻作りである。

C類は、繩目叩きで2種類に分けられる。1つ目は、繩目叩きを縦方向に施こした後すり消し再び繩目叩きを斜方向のジグザグに施す手法である。凹面は、 7×8 本/cmの布目がある。胎土は、金雲母・くさり礫・石英・長石等を含む。色調は灰茶色。焼成は良好である。2つ目は、荒い繩目を縦方向に叩く手法である。凹面は、 7×7 本/cmの布目痕がある。胎土は、石英・長石を含む。色調は赤茶灰色。焼成はやや甘い。この類は、凹面に模骨痕がない事や側面調整から一枚作りと思われる。

第4節　まとめ

今回の調査において、遺構としては、昨年度の統きの道状遺構を検出し、その上方に斜面を大きく削平し造成した平坦地を発見した。この平坦地は端部と斜面上方に排水溝の施設を持ち、中央部には多くのピットを配している。ピットは整然と並ばないものの簡単な建物を建てる為の柱穴と考えられる。時期は、7世紀中頃からの遺物が出土し、山下寺創建時から継続している事がわかる。ピットや溝の埋土から多数の鉄滓や焼土が出土しており、山下寺に關係した鉄製品の製造や再生の小鋳冶を行なっていた事を物語る。このような急峻な斜面を利用しなければならない事は、裏返してみれば、立地的に鋳冶工房が通している証明にもなる。

奈良時代以降になると、祭祀遺物が多くなる傾向がある。後世の攪乱によって削平されている事も多いが、厚い堆積土がみられる場所も多く今後周辺地域の調査にはこの事を念頭に入れておかねばならないだろう。

図 版



調査区遠景



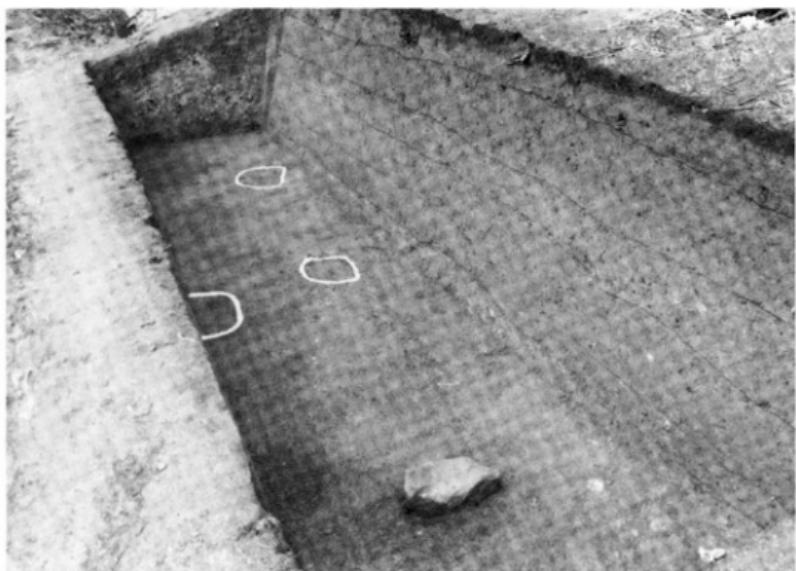
山下寺想定地現況



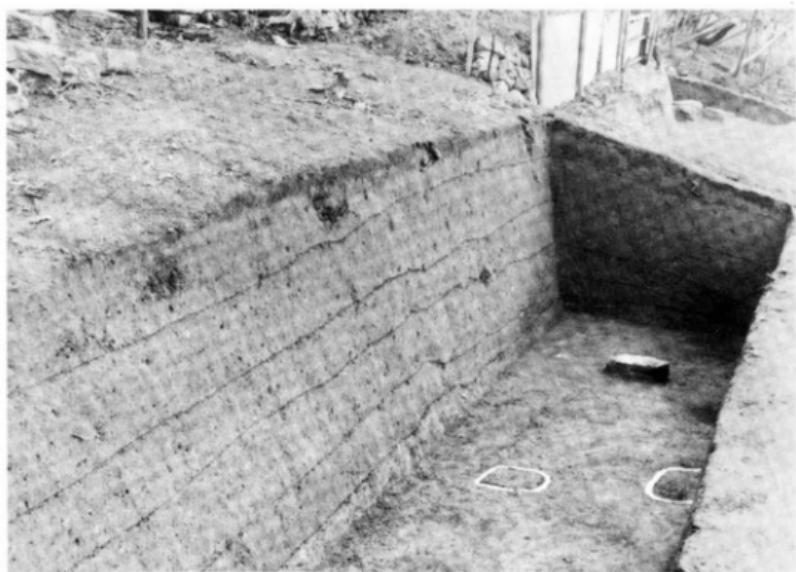
A区全景



C区と山下寺想定地



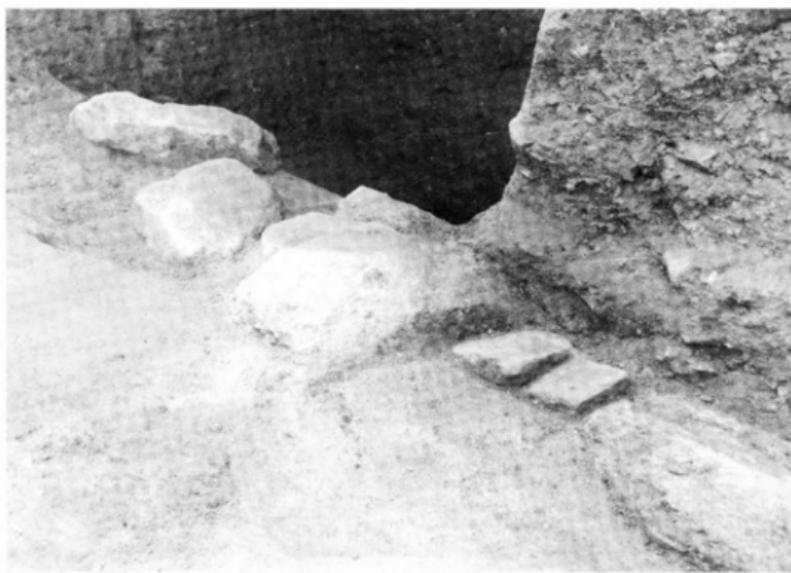
A—1区全景



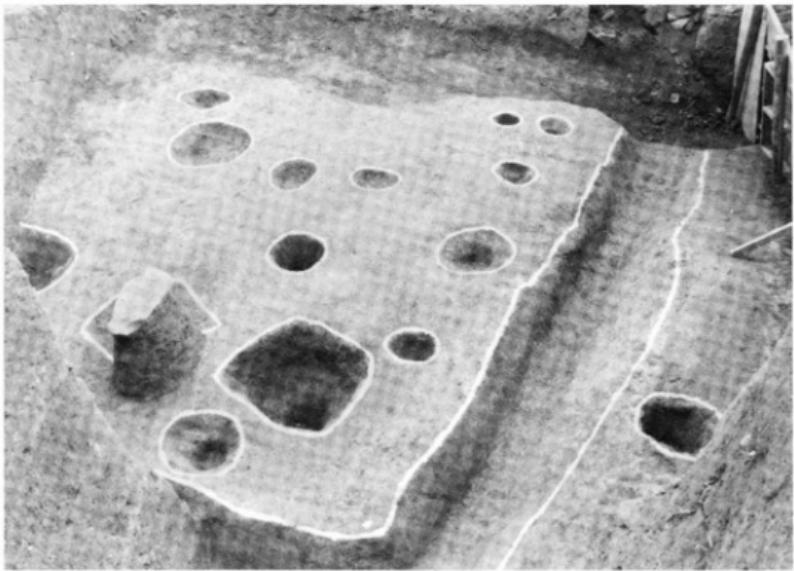
A—1区全景



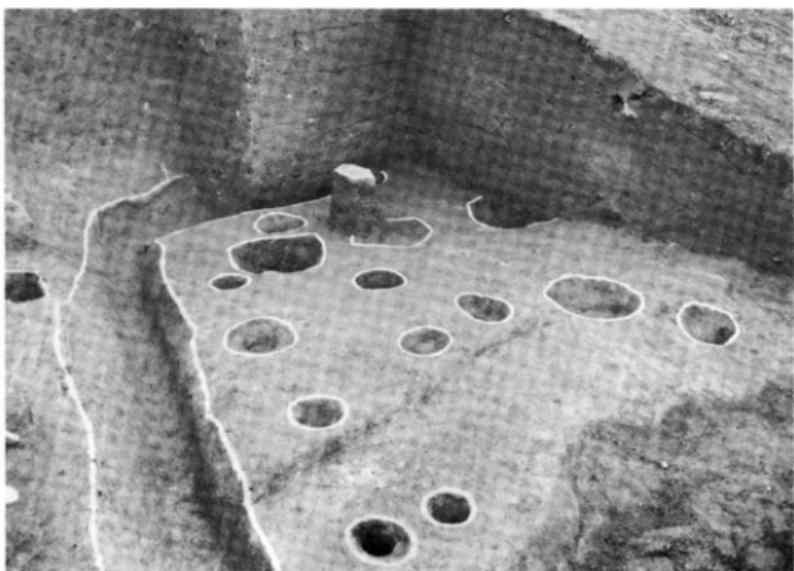
A-1区石積基壇



A-1区石積基壇



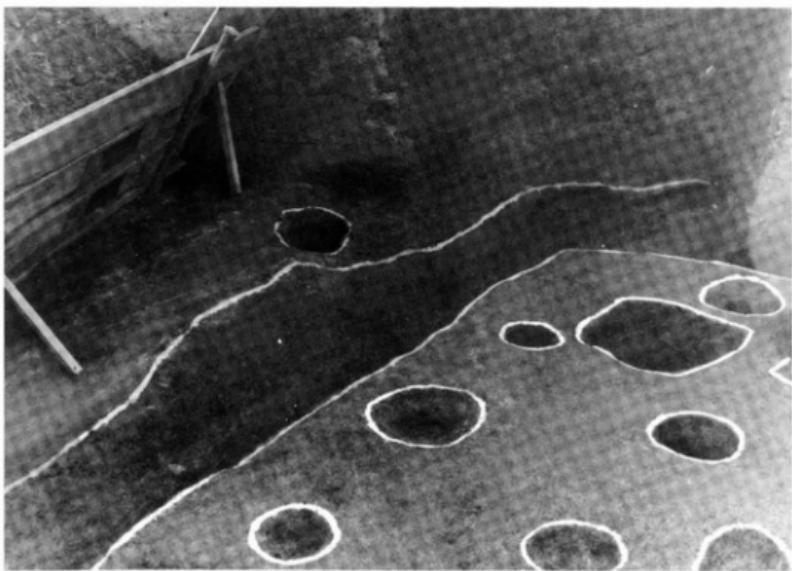
A区遺構



A区遺構



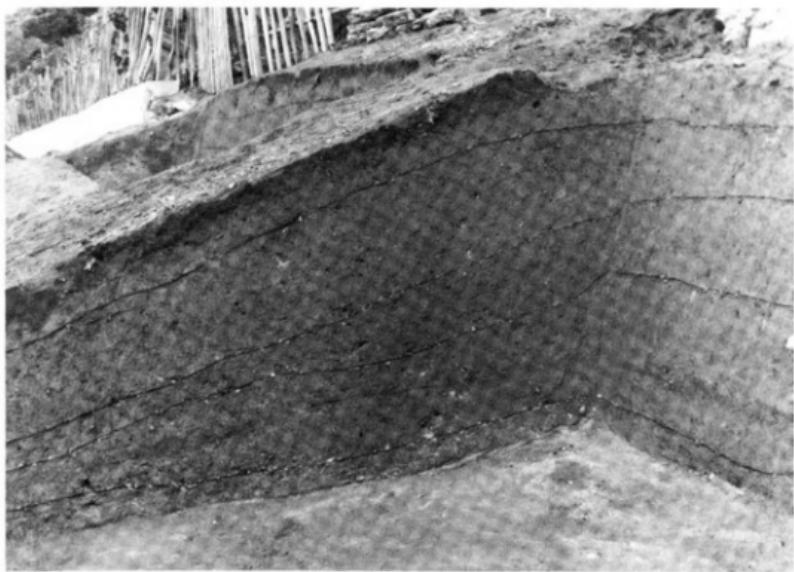
A区周溝



A区造構



A区上層集石



A区土層断面



A-2区 溝3



A-2区 溝3



A区旧石垣



B区全景



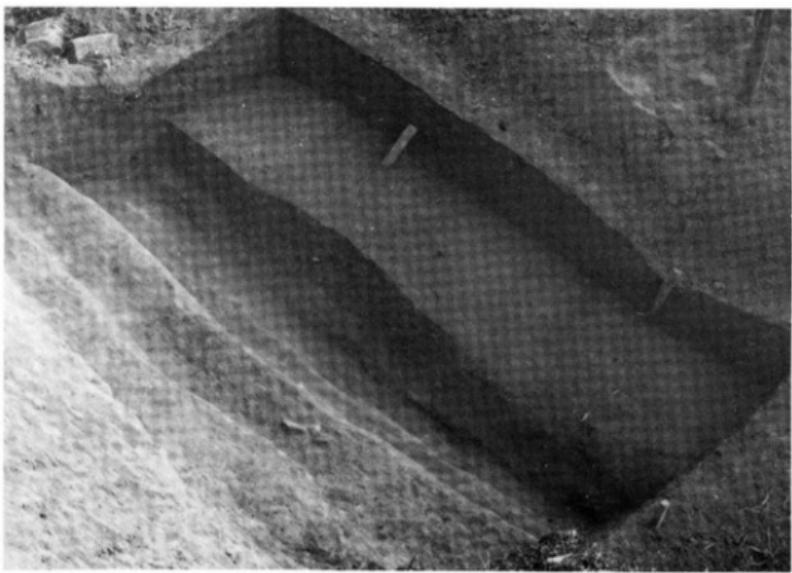
C-1區全景



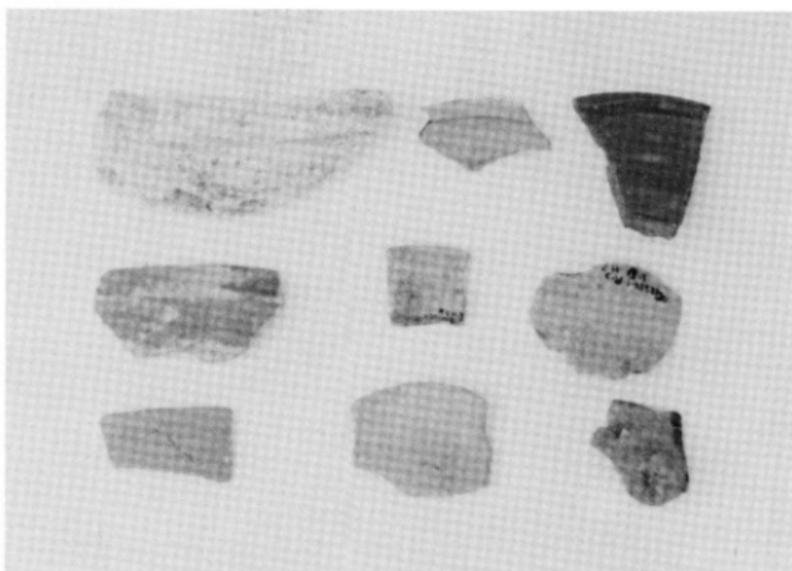
C-2區全景



C-1区土層断面



C-1区全景



出土遺物



出土遺物

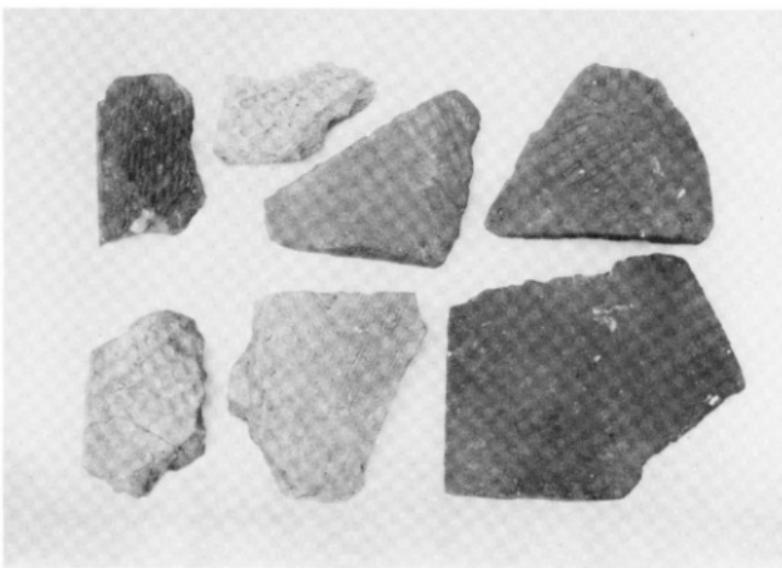


18



19

出土遺物



出土遺物

大 県 南 遺 跡

——市道大県 6 号線建設に伴う——

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和61年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

